

(議事について、事務局より説明)

議題 1 2023 年度かながわ文化芸術振興計画 年次報告(素案)について  
事務局から資料 1-1 について説明後、次のとおり審議を行った。

### ○伊藤会長

2023 年度のかながわ文化芸術振興計画の年次報告書素案について、お気づきの点、あるいは質問のある点があればお願いしたい。重点施策 1 に関して、平本委員の方で何かあるか。

### ○平本委員

カナガワ リ・古典プロジェクト in 海老名・山北は、私の承知しているところでは過去のリ・古典の中で最も観客の方がいらっしゃったと聞いているのでよかった。一番観客が集まったのはなぜかという検証はされているのか、その具体的な要因としてはこんなことが考えられるということがあれば、教えていただいて、それはまた次に生かす形になるかと思う。

(重点施策 1 の施策の効果は) アンケートによってこういった形が出てきていると思うが、項目をチェックして選んで、よかった、普通だったとかというのが一般的に非常に多いと思う。伊藤会長からも、定性的なものも今後考えていかなければいけないと私案が出されているので、よかったということはチェックしてすぐに数が出るが、今後はそれ以外にも、どういうところがよかった、どうしてそれがよかった、どういうことを感じた、そういったことが深くわかるようなことが、まさに定性的なものかと思う。そういったところを全員の方にお聞きするのは難しいと思うので、何人かアンケートに回答いただいた方に聞いていただければ、よかったところの要因というか内容が具体的に分かるので、それをまた次の事業に生かしていくのが有意義なことかと思うが、そういったことはいかがか。

### ○伊藤会長

関連することで追加質問を入れると、平本委員の言われたようにこれについても毎年はやり過ぎだと思うが、何年かに 1 回は突っ込んだ調査を行って、例えば、参加者に対するグループインタビューとか、声を引き出すことも必要かなという気がして聞いていたが、この辺りは事務局の方で、考えることがあったらお願いしたい。

### ○小板橋担当課長

去年のリ・古典 in 海老名・山北は、山北のお峰入りという行事を実施して、これがタイミング的にユネスコに登録されたということでもかなり注目度が高かったというのがある。山北のお峰入り自体が、毎年実施されているものではないので、期間が空いて開催をされ、かつユネスコ文化遺産に登録されたというタイミングもあったのかと思う。(観客が過去で一番)多かったというのは、そこが要因だったのではないかと思う。場所も、少し観客席を設けたり、少し広めの小学校の校庭で開催したりしたので、そういう意味でお客様が集まりやすかったということも考えられるかと思う。

定性的なものも把握して次に、ということだが、確かにアンケートの方での定量チェックはやっているが、自由意見を書いてあるところもあるので、そういうところからここがよかったとか、こんなところをもっと深掘りしたいとかというところは少し意見としていただいているので、今後定性的にするというところで少し整理をしていく必要があると考えている。

### ○伊藤会長

重点施策 2 のところ、子ども、高齢者、障がい者、あらゆる文化芸術活動の充実に関しても、演劇とかそれから合唱の関係の方もいらっしゃるのでもしお気づきの点があればお願いしたい。

## ○井上委員

重点施策の2のところの今後の方向性という点で、子どもから大人までのあらゆる人の文化芸術に親しめるよう、という文言があるが、それは非常にいいことだとまずは思っている。それと同時に今、シニア、障がい者というそういうある種の、一つグループみたいな形での支援になっている。特に、演劇をやっている人間としてみると、ずっと申し上げているが、世代間交流というのは実は非常に重要で、シニア劇団でシニアの方が生き生きされるのもいいが、シニアの方と若い子どもたちが一緒に舞台に立つと相互に非常に大きな効果が生まれる。だから、今後そういうシニアという、あるいは障がい者というところから1歩進んで、世代間なり、グループ間交流ができるような施策も考えていただけるとよりいいかと思う。

## ○伊藤会長

重点施策2は新しい計画では二つの重点施策に大きく分かれて、より強化されている。この後触れるロジックモデルでも、共生共創事業を確認するので、またそこでも発言があればお願いしたい。他に、国際交流などでは何かないか。

## ○石田委員

国際交流で皆さんにお伺いしたかった点が、重点施策3にある国際文化交流という表現についてである。これが大きな施策のタイトルになっているので、国同士のイベント、交流が主体の書きぶりになっている。そういった流れで「今後の課題」というところを読んだときに、文化交流、文化事業による交流といったことが、必要だという書き方になっている。加えて、最後のパラグラフで、神奈川県に多くの外国籍県民が居住しておりとある。ここがやはりとても重要だと思う。重要だが、国際文化交流の充実という屋根の中に入っているにとどまっているというのが、逆にここの特徴でもある。つまり、重点施策2には、子どもだとか、高齢者、障がい者というふうに具体的に書かれてあらゆる人となっても、特に外国籍の方に言及する部分ではないという整理になっていて、重点施策3の文化交流の中で、外国籍の方について書かれている状況だ。少し戻るが、それを踏まえた上で、3ページの四角囲みのくだりに、今私が整理して受け取ったことを踏まえながらも、やはり一言、下から3行目あたりの、市町村や関係団体との連携で、年齢や障がいなどにかかわらずということに、ひと言、国籍にもかかわらずみたいなことが書けるのかどうか、確認をさせていただければ思った。

外国籍の方と一緒に暮らしていくという意識がものすごく求められているし、実感として強くなっている。その中でそういったことへの意識というのは、もう少し、もう一步我々はもった方がいいのかなと思っている。具体的なお提案としては、3ページのその四角囲みのところに外国籍の方への言及というのを入れませんか、ということである。

## ○伊藤会長

このへんは事務局の方どうか。

## ○小板橋担当課長

共生共創の考え方でいくと、先ほど委員からお話があったが、子どもからシニアまで、それから外国籍、障がい者、そこら辺もすべて、共生に入ってくる話だと思うので、ここのところは外国籍というのは受けとめさせていただきたいと思うし、反映について検討したい。

## ○伊藤会長

国際交流の話もいつも話題になるが、ふと思い出したことがある。50年ほど前に神奈川県で民際

外交という言葉を使い出した。もう随分、半世紀くらい経ってしまっているのに、忘れていた方も多と思うが、当時はちょっと違和感が結構あった。ただ、今になると、国際という言葉が生きてきているのではないかという気がする。そう言い出した神奈川として、国際というとなんかどうしても国中心になってきて、国籍は結構要注意になってきているので、このへんはご検討いただき、そういう要素を今回の年次報告の一段に入れたり、あるいは今後の計画のほうで生かしていければと思う。

オリンピックのところはどうか。ここは一応済んだ話だが、終わった後も神奈川県としてそれをレガシーとするために取り組んできたということを強調している内容である。環境整備についても、KAAT だけでなく、文学館の話も入ってきているが、もっと美術館の話も書いていいのではないかと思う。文化施設というと、先ほど出た県民ホールの問題もあるし、このあたりも多分、今後の課題として最後のまとめの方に入ってくるような内容かと思う。

## ○関口委員

非常に細かな話だが、（重点施策5で）KAAT のことに触れており、安全のため修繕工事を行ったと書いている。私は、KAAT に最近2、3回行って、演劇を楽しんでいるが、毎回危険性を感じる。例えば火事や地震があったときに、あんな高いところからどうやって大勢の方が、急な階段やエスカレーターで避難できるのかと、いつも危機感をおぼえながら帰っているが、そこら辺のところを考えると、本当にこれは改善ができたのかどうか。具体的に何をされたのか、教えていただければ次に行ったときに安心できる。

## ○牛嶋 GL

ここでご覧いただいている昨年度の取組ではないが、KAAT では観客を入れての避難誘導の訓練をやっており、それを落語家さんに来ていただいて、実際ホールを見て、来た一般の方を誘導するという、そういった訓練もやっている。そういった意識は高く持っているので、そういった取組を通じながら、安全管理を指定管理者とともにやっていきたいと思っている。

## ○関口委員

今の話はソフトの話。この表現では、修繕工事と実施したとある。だから、何か改善された点があるのであればそれはそれでいいが。急な階段と、エスカレーターを考えると、本当に大丈夫なのかといういつも危惧感を覚える。せつかくいい位置関係にあるので。設備として新しいから、県民ホールに安全に問題があるのは多少わかりますけど。これから何か計画があるのであればそれで構わないが、ここに書いてあるのをみて不安感を思い出したので質問した。

## ○牛嶋 GL

また、KAAT に関しては免震装置が付いている施設である。

## ○関口委員

そういう構造的なことは分かっている。どうしても、公募委員の立場としては、利用したときのいろんなメリットや、デメリットを考えてしまうので、それを申し上げた。

## ○伊藤会長

高層化してくると、階段等々で密集して、事故がますます大きくなってしまふことが起こったりしているので、この辺についても目を配って欲しいということ、どこかに委員の意見として入れさせていただきたいと思う。

## ○大島副課長

今の関口委員のご指摘のとおり、確かにソフト面とハード面、両方いろいろ対策していかないといけないと思っている。当然ハードの対策は大切だが、ソフト面、いわゆる人の面で、そういうことがあるという内容も踏まえてやっていくものだと思っている。私も何度も KAAT に行っているが、結構上に登っていくので、確かにそういうご意見があると思う。一般の利用していただいた方のご意見は非常に重要だと思っているので、参考にさせていただいて今後進めていきたいと思う。

#### ○伊藤会長

20 ページ以降のところ、細かい説明があるが何かあるか。

#### ○蜂飼委員

3 ページ目の囲みの中について聞きたい。5 行目の博物館、美術館、劇場等というところに、ぜひとも文学館を入れていただきたいと思う。特に明記することができないという理由がないようなら入れた方が自然かと思う。

#### ○大島副課長

「等」というところに入れていたつもりだったが、神奈川近代文学館を所管しているのでそこは対応したい。

#### ○石田委員

17 ページの(2)人材育成のところ、本学との連携を書き添えていただき感謝する。毎年学生ともども学ばせていただいているが、昨年度は長塚芸術監督にまでお越しいただいた。長塚さんは初めての授業だとのことで、すごく緊張されながらも、とてもいいお話をしてくださった。本当にいい関係を築かせていただき感謝している。

#### ○伊藤会長

提案されたことについて事務局の方で整理をしていただければと思う。続いて、同じく議題 1 に関わる形で、共生共創事業のロジックモデルについて事務局の方から説明する。

事務局から資料 1-2 について説明後、次のとおり審議を行った。

#### ○伊藤会長

今回はいつもと違ってこの 5 年間の経緯、発展具合もわかるように資料をまとめてもらった。ロジックモデルというのは、県が行っている文化振興行政を構成する事業が、どのような形で、回数だけではなくどれくらい成果を上げているのかということということもいくつかの角度から見ているという形で、共生共創事業を一つのモデルケースとして検討してきたものである。

ステークホルダーに関してこれだけかといえどもっと違った角度から取る必要もあるかもしれないが、初めから完璧にするのは難しいので、例えば中間アウトカムに関して言うと、出演者と鑑賞者それぞれについて、変化したことを何とか数値化して出しているという形で進めてきている。これについてご質問やご意見、あるいは今後の発展についての提案も含めてあったらお願いしたい。

#### ○関口委員

用語のところ教えてほしい。日本語に馴染んでいないような言葉があつて、特にアウトカムは、括弧して成果という非常にわかりやすい日本語の表現がある。前にこの委員会で議論したのかもしれないが、アウトカムという表現は無理やり使っているような気がしてしょうがない。これをことさらに成果ではなく、アウトカムという言葉を用いた理由はどこら辺にあるのか。

## ○小板橋担当課長

県の大きな総合計画の中でこの言い方を使っている。その総合計画の中にこのかながわ文化芸術振興計画が位置付けられており、整合性を取るためにもこの言い方をしている。ただ、分かりにくいというところもあるので、括弧書きで、成果を記載している。

## ○関口委員

県のいろんな資料では、成果というよりもアウトカムが一般化しているのか。

## ○小板橋担当課長

一般的というか、使われている。

## ○伊藤会長

ロジックモデルという言葉自体もこの数年広がってきた。評価関係の専門家の間では、通常に使うが、一般の方たちには理解できないことじゃないかと思う。事前の打合せのときにも事務局の方をお願いしたが、この審議会の資料として、またあるいは議会に提出する資料としては、計画にも使っているなのでこのままでいいと思うが、この審議会の内容が公表されたり、あるいは共生共創事業について、この5年間の成果がどうあったかということを一一般の県民向けにわかりやすい、パンフレットなどにまとめる場合には、なるべくこういうロジックモデルやアウトカムなどの普段使っていない言葉を避けて、いわゆる日本語の方にしてまとめてもらえればと思う。

細かい数字よりは、むしろどのような成果を上げてきて、人々がどのように変化してくかということについて、例として数値を少し挙げつつ、この5年間、神奈川で始めたこういう事業が、社会を変えていくということを示していただければと思う。関口委員が指摘されたように、なじみがない言葉を使って議論が続いてきているので、誰に向けて見せるかによって検討をお願いしたいと思う。

この辺について他にどうか。共生共創事業というのも、これを見ると、狭義ではシニア劇団が中心になっているが、それ以外にも様々なことが行われてきて広がり出している。多文化共生も最初は入れなかったが、今は入るようになってきている。共生共創事業は今後も続くだろうから、例えば、今後に向けてのご意見も含めてあればお願いしたいと思うがどうか。

## ○井上委員

先ほど申したとおり、世代間交流やグループ間交流を進めていただきたい。もう一つ、私の実感として、私は市民参加型の演劇をよく手がけてきて、今も手がけているが、先ほど石田先生からもお話があった外国籍の方の話で、両親のどちらかが外国籍という子どもたちが普通にそのグループの中に参加している状況である。ちょっと言い方がひどいかもかもしれないが、共生を目指すというよりも、もう現実としてはもう共生が始まっているというのが、私の実感で、どちらかという世の中の動きに後追いになっていると感じるところはある。現実としては何の問題もなく、そういう子どもたちも差もなく参加している。学校の方でも私は指導しているが、学校にも当然そういう子たちがものすごく数がいって、私の周りよりもずっと子どもたちの方が多文化の状況にすでにある。演劇をやっていると当然言葉を使うので、中には日本語をしゃべるのはできるが、読むのが苦手で、台本が読めなくて、役者ができないようなところも出てきている。でも、そういう子たちもうまく口伝で、仲間が教えたりして、役者をやらせたりというのがもうあるので、言い方はひどいが、後追い、遅れてしまっているのではないかというのが印象としてはある。

## ○伊藤会長

重要なお指摘だと思う。鈴木委員。基礎自治体の方でもこの問題は今、重要な課題になってきているのではないかと思うがどうか。

### ○鈴木委員

自治体の方でもこの共生社会というのは今重要な位置付けになっている。私は大和市（の職員）だが、大和市は、88 ヶ国にルーツを持つ 8,000 人あまりの外国籍の方がいらして、大和市民の約 30 人に一人が外国人市民である。そういった意味で、井上委員が先ほど言われたように、外国の方がいて当たり前の社会になっている。おっしゃるとおり、それを目指すというか、それを平準化していく取組をどうしようかというのはまさに今、私の所管している部署が文化も含めてそういう部署なので、取り組んでいるところである。

### ○伊藤会長

ほかにいかがでしょうか。

### ○平本委員

短期アウトカム、一番上の四角の囲みの中に「2023 年度は、年間を通じてシニア合唱を実施するなど発展的な取組ができたことや、県西地域におけるマグカル展開促進補助金の交付事業実施回数増加等により、共生社会の理念の普及に寄与することができた」というふうにある。県がやることなので、県下全体にということが基本的なスタンスだと思う。そういう中で、今までを見ていくと、どうしても横浜・川崎は、何の事業にしても多くて、それによって得られた結果で年次報告書のようなまとめの冊子が作られてきたという傾向があると思う。そういった中で、ここにあるように、県西地域で共生共創事業が大きく行われて、効果が見られた、県下に広くそういったことが得られたということは大変いい結果だと思う。地域の偏りがなく、県下全体に満遍なく広く事業の効果が現れたということはせっかくなのでもう少し強調していいのではないか。

### ○石田委員

数字がすごく伸びている。

### ○伊藤会長

県西が最初の時は回数が少なかったのが増えてきているということは、この事業がもう広がっているという意味で、やっぱり大きくアピールした方がいいのではないかと思う。

### ○大島副課長

平本委員のご指摘のとおりである。横浜・川崎は会場が豊富で人集めしやすいので中心になっているが、県西地域や三浦半島地域は人口減少が結構進んでおり、人口が減ると文化芸術の継承もどんどん衰退していってしまう恐れもあるので、気をつけて見て、力を入れていかなきゃいけない地域だとは思っており、県としても文化課だけではなく色々なことに取り組んでいる。非常に難しい問題が色々あって、神奈川県は面積が非常に小さい県だが、郷土色は結構豊かなので、引き続きこういう地域はしっかりと目を配らなければいけないところで、今の意見は非常に重く受けとめたいと思う。

### ○伊藤会長

それではこの話についても、審議会の委員の意見や、あるいは今後の発展をさせる中で生かしていけるようにしていきたいと思う。最終的なまとめは、事務局と私の方に任せていただきたい。

では後半の議題 2 に移る。かながわ文化芸術振興計画、令和 6 年度から令和 10 年度における進行

管理について、事務局から資料の説明をお願いします。

**議題2 かながわ文化芸術振興計画（令和6年度～令和10年度）における進行管理について**  
事務局から資料2-1、2-2について説明後、次のとおり審議を行った。

### ○伊藤会長

審議の前に、事務局から説明のあった、新しい計画における進行管理について、審議会に先立って、事務局とは事前に調整し、その上で私案を作った。先ほど議論したロジックモデル等々も踏まえて、新しい計画に関しても、そういう視点を取り込んでいこうということでの提案である。

簡単に読み上げると、審議会の中で数値目標だけじゃなくて、数値によらない部分も含めて達成度とか事業の質、内容等を検証していく必要があると議論がなされている。それを受けて、共生共創事業を例として、目的を達成するに至るまでの論理的な因果関係を示したのがロジックモデルである。因果関係というものには様々な関係者、行われた事業の数、その変化、出演した人、鑑賞した人たちの意識変化みたいなものを積み上げて作り上げた。その上で、今後に向けて、ロジックモデルを作成していくと良いというのをやっぱり少し踏まえていくと同時に、今後これをどのようにしていくかについてちょっと意見を述べている。共生共創事業については、最終アウトカムの実現に向けて、障がい者向け・高齢者向けなど多岐にわたる事業を展開しており、鑑賞者数等の数値の推移だけでなく、満足度や関係者の声といった、いろいろな視点から総合的に事業全体を検証していくことが必要となった。そのため、ロジックモデルを作って全体をまとめて評価することによって現時点での達成状況が可視化できる、こういった事態があったと思う。

しかし一方で、共生共創事業以外の事業について、これを広げていきたい気持ちもあるが、なかなか同じ目的の複数事業をまとめて、総合的に評価することで、達成度を評価していくこういうロジックモデルに馴染む事業というのが今のところ、なかなか見つかりにくい。私自身は伝統芸能、重点1の方に関して言うと、リ・古典とかそういったものについて、そういう視点を取り込むのではないかという気もしないでもないが、これは非常に長年にわたって行ってきていて、共生共創事業のように、年度を限って積み上げたものもないということもあるので、さかのぼってやっていくことも難しい。そういう形があって、ロジックモデルを作成していくための作業負担に見合う効果がどこまで期待できるのかという課題がある。

そういうことから、今後に向けては、共生共創事業についてロジックモデルを作成してきた成果を踏まえた上で、次期計画決定を視野に、例えば、現計画が3年経過する時期を目途に、資料2-2にあるものだけでなく、数値以外の定性的なことも含めた中間総括をしていくことはできないかということ提案している。そういう私の私案も含めて、ご意見を、ご提案があればお願いしたい。このあたりについては今回の年次報告書に関して言うと、最後のまとめ、文化芸術振興審議会委員意見のところに向けていきたいと思っている。

### ○石田委員

会長私案でまとめてくださったが、ロジックモデルに馴染まないものというのがほとんどだという中で、3年目を目途に、KPIの目標値として設定しているもの以外、ロジックモデルとかKPIとかそういうところに馴染みにくいものについても、数値以外の定性的なものも含めて総括する。そういったことを方針として立ててはどうかということと認識している。

その時に数値以外の定性的なものというのをどういうふうに取り上げていくのかというのが今ひとつまだ、もしかすると今の段階では、皆さんと共有しにくいのかなと思う。例えばどういうことがありそうなのかお話いただけるか。

### ○伊藤会長

正直に言うと、数値以外という言い方に語弊がある。いわゆるアウトプットのな数値ではなく、今までだと満足度という形で出していたのが多いと思うが、何%というのも先ほど平本委員も指摘されているように、質問の仕方によっても随分違って来るし、アンケートに答える人は、大体満足した人というのがあるので、回収率も含めて見ていかないと分かりにくい。先ほど触れた形で言うと、毎回やるのは無理だが、3年に一度くらい、事業の途中で参加者のグループインタビューというやり方を調査会社の中でよくやったりするが、小一時間ぐらいの話合いを持って、本音の部分だとか、参加者が感じる問題点みたいなものを引き出したり、あるいはこうして欲しいという希望を引き出したりするようなやり方がある。そういったもので数値化しにくい部分を出したり、あるいはそれを何とか数値化するにしても、ちょっと違ったインデックス、インジケータを作ったりするという形も必要になってくると感じている。ただすぐにこうすべきだという意見がない、思いつきがないので、実際に来年、再来年と、次の期の審議会で数値を議論していくときに、2年目くらい、あるいは3年目のときに、2、3年の動きを、議論を踏まえた上で、新しい評価の指標をその段階で考えていこうと、先送りしたような形の言い方をしていることは事実である。

### ○石田委員

となると、中間評価のやり方としては、例えば参加した方からのご意見というのがやっぱり大きな指標になるのでしょうか。

### ○伊藤会長

ステークホルダーという形で、その事業に関わった人というのは、当然出演した人、鑑賞した人、例えばボランティアとか、あるいはスタッフとして仕事をした人とか、そういった人たちも結構いるのではないかと思う。そういう人たち自体が、どのような変化をしているかというものを探っていくということがあるのか。例えば伝統的なものに関していうと、もうこれはなかなか区分けが難しい世界で、出る人と見る人は入替可能なのが、伝統的な世界なので、共生共創事業のような形にすっきり分けることはできないかもしれないが、事業の中で関わっている人たちが量的に増えたか減ったか、満足度はどうなのかとか、あるいは意識として変化したのかどうかそういう部分を導き出したいという気がしている。

### ○石田委員

ステークホルダーと具体的にお示しただけだったのでイメージが皆さん湧いたと思う。グループインタビューは良い方法ではあるけれども、そういう場を設定しなければいけない。例えばその満足度調査というアンケートを取ったときに、ちょっとナラティブな部分、こういうふうな意見がありましたということをやうまくまとめて、それを何か発表するそういった方法もあるだろうか。なんとなくイメージできた。

### ○伊藤会長

何か皆さん方の方で事業を行ったときに、その成果を図るためにこういったことをやってみたという話が参考になればお願いしたい。

### ○桐生委員

最近のニュースで、博物館浴とか、美術館浴、という言葉を目にした。そういった場所に行って芸術を鑑賞して、触れると精神的な安定を得られるという話。未病改善を意識した魅力的なコンテンツという言葉もあるし、高齢者の方の精神的な安定、健康を考えた上で、そういった視点を持って、自治体と大学が協力してそういった調査をしているところもあるように聞いているので、神奈川県でそういったことがもしできるのであれば、定性的な調査にも繋がるかなと思う。

## ○伊藤会長

先ほど井上委員から出された話で、外国籍の子どもたちが一緒にやっていて、特に共生の部分を超えてしまっていて当たり前になってきていると。その当たり前になっていること自体を進行管理の中に示す方法というのではないか。

## ○井上委員

私は演出や指導をする側で、年齢が上なので、なるべく意識をしないようにという心がけをしている。指導の方法も差をつけないので、そのうち、外国籍であることをこちらも忘れてくるというか、外国籍のお名前を呼んでいても、日本の名前の人との差がだんだんこちらも無くなってくる。時間がそうさせるのだと思う。特に課題としてどうこうしているというのが現状はない。ただ、先ほど申し上げたとおり、学校では、最初に発声練習をやらせたときに、外国籍の子が上手くできなくて、その次の週に、やめたいという相談をしてきたのに対して、演劇というのは必ずしも言葉だけじゃないから、スタッフをやってもいいから一緒に参加しようというふうに言って、それで結局今もまだ在籍しているという状況である。特にハードルを感じているところは今のところはないので、先ほど申し上げたとおり、大きなお題目として共生共創を考える以前に、現場では何となく工夫しながら、もう進めているというのが現状である。

## ○伊藤会長

これについては今日すぐに結論を出すのは難しいと思う。もっと御意見がある方もいるかもしれないが、こういったものを、審議会の意見の一つとして入れて、そして次の進行管理の中で検討していくというふうに持っていきたいと思うがいかがか。

## ○平本委員

今の満足度という形で、色んな事業を全部というのはなかなか対応するのは難しいと思う。3年というふうに今お話があったが、一つの方法として、インタビュー、グルーピングという形をとる、それで皆さんの意見を集める中で、継続されている事業でキーとなるようなものを一つ、二つ抽出して、それを何年か様子を見ていくというふうな、そこには多分おそらく参加したスタッフの方もおられるし、実際にそこで演じている方もいらっしゃるし、観客の方もいらっしゃるだろうし、そのいくつかをキーになるようなというか、そういった事業を選んでみて、そこをターゲットにして、色んな関係者の方から話していくような、そういったことで思いを集める、そんなことは努力できるのではないかなと思った。なかなか全部というのは、おそらく無理かなというふうに思う。

## ○伊藤会長

いくつかの事業でこういう分析をしてみたいというものを推薦していただいて、考えていくということが必要かもしれない。では、今日出たご意見を最後のページに可能な範囲でまとめていただきたいと思う。

審議会としての整理は、私にご一任いただいて、事務局と私の方で調整していきたいと思う。

議題についてはこの辺にして「その他」に入っていきたいと思うが、部活動の地域移行について、事務局から説明願います。

その他 (1)部活動の地域移行について  
事務局から説明後、次のとおり質疑を行った。

## ○井上委員

地域移行については私もずっと意見を色々している。私自身も登録をしてないので、是非したいとは思いますが、実はこういうデータベースがあることが現場には全然降りてこない。私は横浜市内の中学校で演劇部を教えているが、データベースがありますから登録してくださいというようなお話が全くないので、私はたまたまここで知っているのがデータベースの存在は分かるが、それ以外の方はほとんど、知らないから登録できないのではないかと。演劇に関して個人名は書いていないが私は誰か大体分かる。おそらくある人が、このデータベースの存在を知って、仲間にぜひ登録しませんかっていうふうに呼びかけたというのが推察されるメンバー。これをどういうふうに周知していくかということを考えていただきたいということと、前もお話しましたが、市町村のデータベースと、県のデータベースをどう統合していくのかという問題を考えていただきたい。

それともう一つは大きな話になるかもしれないが、部活動の地域移行は基本的に教員の業務の軽減などを目的としていると思うが、ここに登録されているのが、大体文化系でいうと吹奏楽とか演劇、もしくは科学である。部活動はそれ以外にも美術、イラスト、文芸など色んな部活動があるが、そこにはどういうふうにアプローチしているのか。吹奏楽と演劇が地域移行しても、文芸部や美術部はどういうふうに地域移行していくのか、私は門外漢なのでもう想像もできないというか、美術部がどうやったら地域に渡せるのかということは全く考えられない。どういうビジョンがあるのかというのは知りたいところである。

## ○牛嶋 GL

最初にお話のあったデータベースの周知については、立ち上がるときに各文化団体にはご連絡差し上げている。また、文化芸術系の学部のある大学にもご連絡は差し上げているので、そういったところからまだ浸透してないところはあるので、工夫してもっと広まるようにというのは考えたいと思う。データベース自体は県のスポーツ課が主体であり、また、教育関係は教育局の方でやっているの、周知方法は担当者同士の打合せで相談していきたい。

市町村との整合性の話については、イメージしているのは、県の方では、市を跨って活動できる人が登録してもらい、市はそれぞれの市町村単位で活動できる方が中心なので、棲み分けはできていると思っている。

また、吹奏楽部が中心になっていて、他の文化系のクラブ活動についてどうなっているのかということ。今のところ、題目としては休日の部活動移行という言い方になっていて、この改革の推進期間が3年間だが、休日に活動している部活というのは吹奏楽がどうしても中心になっているので、動きとしては吹奏楽が中心になっているところがある。今後さらに進んでいくと、色んな分野の指導者もデータに入っていけたらいいので、関係の団体の方にお話をしていくなど工夫していきたいと思う。

## ○井上委員

広報のことで、私は県の演劇連盟なので、演劇連盟の方には広報が来ているだろうというのはメンバーから見て想像できる。実はもう演劇も吹奏楽も多分他の部活も、体育会系は特にだが、外部指導員という形で現場に入ってらっしゃる方が随分いらっしゃるはず。その方たちが、私の知る限りほとんどこのデータベースにいない。もちろん登録は任意なので、その方が知っていても登録していないかもしれないが、大会などでそういう方とお話をしても、この話が出ないので、おそらく知らないと思う。現状その指導員をやっている方に、どうやったらそれが届くかということは、教育系の部署の方を通じてなのかもしれないが、考えていただくともうちょっとデータベースが充実してくるのでないかと思う。

## ○石田委員

本学の卒業生はそういう現場に入って吹奏楽の指導をしている者が多い。登録することでどのよ

うなことが起きそうなのかがもう一歩示せると登録へのインセンティブに繋がると思う。ここからは質問だが、このデータベースに登録していらっしゃる方に関して、外からアクションがあった場合に県として何か積極的にお繋ぎするとか、もう一歩先のことを今やっているのか、今後やるのかということが一つ。もう一つ、資料3-1にある研修会、ここに7月7日の実施要項も書かれており、116人の方が参加されたということだが、どういう人が参加して、このデータベースにどの程度登録されている方々なのかといった状況についても教えてほしい。

### ○牛嶋 GL

まず、データベースに登録してその先というお話について、お答えになるか分からないが、市町村の方から、こういった人を紹介してほしいとか、こういう人の登録があったら連絡先を教えてくださいという受付をするようになっている。ただ、スポーツ系の方にも確認したが、今まで引き合いが来たのが1件だけである。これをどう分析するのだが、例えば、今移行している部分は、今までの部活動の延長の人づてのところで足りているのか、吹奏楽は割と運動系の部活に近いので、今までの枠組みで休日もできるようなところもあって、ここが難しいところである。登録者が増えるのはいいことだが、ただ、市町村の引き合いがないと、ただ登録されただけで、半分かえって失礼になってしまうところもある。登録したからといって絶対紹介されるわけではないというのを前提にやっているが、そうは言っても、そんなにいっぱい増えて引き合いがなくてもどうかというのは難しいところもある。

それから、研修講座の方に来ている方の属性というのは押さえられていない。しかし、この講座はデータベースに登録できる要件になるので、例えば、資料3-1のほうに、指導者の登録要件が①から④までであるが、①から③の要件は満たさないがやる気、スキルがある④の方が受けていただいているという状況かと思う。資料3-1の登録者数の時点が7月31日であり、7月には約116人の方に受けていただいているので、こういった方も徐々に入ってくるかもしれない。現状としてはそういった状況である。

### ○大島副課長

先ほど井上委員からおっしゃられましたとおり、これは教員の負担軽減というところが非常に大きい話の中で進んできている話というのは実際のところである。今国の方でも有識者会議をやっていて、来年の春に一旦方針を出すような話で議論しているところで、令和5年度から令和7年度は集中的に取り組んで、本格的には令和8年度ぐらいという流れのようだが、地域間格差が出てしまうのは非常によくはないことである。

今の井上委員や石田委員からご指摘があった点を踏まえて、国の議論をしっかり注視しながら、しっかりデータベースを利用していただけるような形にしたい。特に効果の面を知っていただかなければ登録者は増えていかないので、部活動の庁内の会議で、周知のあり方でこういう意見があったということを議論させていただき、周知の方法を考えたいと思う。

### ○伊藤会長

これについては国の方もまだはっきり言ってないようなので、どこまで進めていくのか、話題になっている割には見えてこない世界だが、経過報告を審議会の中で次のときにもしてもらおうという形でいきたいと思う。今日の議題はこれぐらいだが、最後に、全体にわたって質問等々がもしあればお願いしたい。

### ○鈴木委員

事業の成果指標について、大和市の方でも、計画に対する成果指標がどうしても数値に頼りがちになってしまうが、例えば一つの事業をやって、今年は100人、来年は200人だったら成長だったとい

う単純なものでいいのかということ、会長がまとめていただいたところに書いてあるとおり、実際の満足とか質というのはどう測ったらいいのかという話になった。そういった中で、例えば、スポーツや文化施設に来ている人に、大和市の事業は楽しいですかと聞くと、比較的好意的に出る。来ている人たちに何かを聞いても比較的好意的になってしまうので、例えば一つのアンケートを取るときに、初めて参加しましたという方に、また次回も来たいと思いますか、と聞いてみるのが考えられる。例えばアンケートを10人にとって、10人が毎回来ている人だと、そこからは発展がない。初めて来た人が多ければ、周知もできているという判断もできるし、初めて来てどう思ったか、どこがよくなかったかを聞けば参考になるのではないかと、そういったこともしていかなければいけないということをついこの間、自分の部の計画のときに話をしたところである。アンケートの分析はすごく難しいと思うが、この満足度というのは、なかなか数値だけでは図れない。

### ○伊藤会長

初めて来た人に特化して見ると、傾向が見えてきますよね。

### ○平野委員

私の関心事の音楽の面からいくと、来年の3月以降県民ホールが休館するという事は非常に深刻な問題である。例えば、大きなオペラ公演は横浜市でやる場合には県民ホールを使っていたので、それに代わる場がない。これは県というよりはもしかしたら市単位のことかもしれないが、川崎にはミュージア川崎シンフォニーホールがあるし、横浜にはみなとみらいホール、横須賀にも鎌倉にも立派な芸術ホールがある。先日のミュージア川崎のフェスタ・サマーミュージアは連日2週間ほど超満員だった。それに対して、みなとみらい側でも、それぞれサマーフェスタ的なものはやっているが、幼児向け、老人向けとか誰でもと言いつつ、非常に軽いもので集客しようというもの。しかし、クラシック音楽ファンはものすごく多くて、特に、会社を定年退職した年齢の男性群が圧倒的に多いが、そこで見ると横浜地域、横須賀も鎌倉も満足いくものがない。そこで、むしろ川崎、石田委員のいる新百合ヶ丘の昭和音大や、洗足音大を使って、川崎が活性化しているような状況である。その一方、県立音楽堂での催しが非常に高尚になっている。音楽堂も、クラシック系のモーツァルトやベートーヴェンとか、そういった一般の音楽ファンが鑑賞できるような催しがもう少し多いと思う。神奈川フィルハーモニー管弦楽団は神奈川県のものではないが、顧問に黒岩知事が入っているのでもう少しかなフィルの使い方、ミュージアは東京交響楽団がレジデントとなっているが、そういった面で横浜に音楽面、来年以降の県民ホールの休館を考えると、今日こうしてみると音楽芸術のことがあまり無いので発言が途切れた。

別のことで、さっきの部活動のことだが、学校教員がやっている部活動と、指導教員が休日にやるものとは、学校教育上どういう区別があるのか。

### ○井上委員

現状でいうと、土日の部活動のときは、顧問も必ず同席する。指導員が単独でということは、現状は多分ないと思う。

おそらくその土日の部分を、教員がいない状態で、外部の人にしようというのが今の地域移行の考え方だと思う。

### ○平野委員

スポーツ系は207人も登録されている。多分、バスケ・バレーや野球部というのはもう土日に練習をかなりたくさんしている。

### ○井上委員

体育会系の部活にはコーチがついている場合が多いようで、多分その時も顧問の先生も一緒にや  
ってらっしゃると思う。

#### ○平野委員

さっき石田委員が言っていたが、吹奏楽系はもう圧倒的に先輩たち、音大卒業した先輩がほとん  
どコーチに入っている。むしろ専任の先生は、コーチにまかせっきりのような形で、そのため、文  
化系の登録は 20 人しかいませんけれども、ここは、もう少し実態を把握すれば、登録者が増えるの  
ではないかなと思う。

#### ○井上委員

余談に近いが、演劇部は創作脚本を書くことがあり、この間改めて顧問の先生が書いた上演を見  
たときに、「でもうちの顧問部活に全然来ないからね」という台詞があった。実際私も指導をして  
いて、土日は先生は業務がないから、ずっといらしてくださいですけど、平日の練習は最初に顔を  
出して、あとは井上さんお任せしますと、最後終わる間際に来て、ありがとうございましたと。果  
たして本当にそれで先生の業務が軽減するのかというのは、本当に思っているところである。先生  
は部活動の間中抜きの部分は何をしているかということ、おそらく職員室で事務作業や何か別の仕事  
をされているのだと思う。なので、実は、本当に教員の負担軽減になるのかというのは、土日に関  
しては軽減されると思うが、かなり疑問を持っているところではある。

#### ○伊藤会長

それではこれをもって本日の審議を終了する。